

はじめに

昨年度から私たちは、「知識創造の力を育む授業—かかわりの場をデザインする—」という新しいテーマで教育実践研究をスタートしました。これは、本校児童を通じて浮き彫りとなりかつ普遍性のある学習活動における課題を抽出し、そこから求められる学力のあり方を各種提言などによって整理し、“知識創造の力”（子どもたちが、主体的かつ協同的に学習に取り組み、獲得した知識をさらに共有・結合して、新たな理解を生む営みを主体的に展開していく能力）の育成をめざしたものです。子どもの協同的な活動場で互いの直接的・間接的な働きかけによって、意識が学習課題に向けられていく活動を“かかわり”と捉え、知識創造が起こる一連の学習活動が行われる“場”を、教科及び単元ごとに具現化することから始めました。

本年度は、得られた研究成果を検証・発展させ、“かかわりの場をデザインする”から“「かかわり」を活性化する”という新たなステージを設定し、実践しました。‘かかわり’の活性化’とは、子どもの学習への意識が高まり、互いの感じたことや考えたことを積極的に深めていこうとする状態、と考えています。このステージでは、‘活性化する’ための具体的な手だてを教師が授業実践として提起しました。また、現時点での、“「かかわり」の場”と連動した“知識創造”の明確化を試みました。

さて、昨今、教育基本法とそれに付随しての教育関連三法の改正、また大学に目を向けますと、教職大学院の設置に向けた動きなど、教育界を取り巻く環境が大きく変貌しつつあります。このような中で、改めて附属学校園の存在意義が強く問われています。特に本学においては、平成20年度に3学域16学類に再編され、いわゆる計画的教員養成機能は人間社会学域学校教育学類へと引き継がれます。学内における附属学校園の位置づけも含め、私たちはこれから大きなターニングポイントを経験することになります。

しかしながら、このような状況下だからこそ、なおさら児童をしっかりと見つめ、児童の目線が主導する改革を、現場サイドから積極的に提言していく必要があります。私たちは現在までに様々な教育課題について率先して実践研究開発を行い、研究会や研究紀要などを通じてその成果を公表してまいりました。今やルーチンとなったこのような教育実践研究を通じて、「地域におけるモデル校としての地位を築き、その確立をめざす」ことが、附属学校園のあり方の一つの解答となるのではないかと考えます。

今回の紀要はその61集目となります。高覧いただき、内容についてはもとより私たちがめざす方向性につきましても忌憚のないご意見とご指導を賜れば幸いです。

平成19年11月15日

金沢大学教育学部附属小学校
校長 井原良訓